乙第2号証の14

沖縄型金型

―芽吹く技術〈14〉

企業に聞く㊥

沖縄はアジアのセンター

杉 時夫社長
東京計装（東京都）

うるま市の国際物流拠点産業集積地域で2011年7月から沖縄工場の操業を始めた計測機器国内最大手の東京計装（東京）。流量計と液面計の開発、製造を手掛ける。沖縄の魅力や進出理由などについて、社長の杉時夫氏に話を聞いた。

―沖縄の魅力は。

「沖縄がアジアのセンターという点だ。全日本空輸（ANA）の貨物ハブ（中継拠点）事業でアジア圏がぐっと近くなった。アジア主要都市を4時間圏内で結んでおり、事業展開に有利に働く。地理的メリットは大きい。マーケットが大きい中国市場の開拓を図る拠点として沖縄工場を運営していきたい」

―沖縄工場で展開する事業は。

「今は円高が進み、コスト高になっている。国内だけで生産すると高くなってしまい海外勢に太刀打ちできない。円高の影響を避けるため海外に生産拠点はあるが、例えば中国製だと顧客に敬遠される場合がある。やはり日本で作ったものへの評価が高く、日本製だということにニーズがある。そこで部品調達は中国や台湾、タイなどで行い、組み立てを沖縄工場で展開する。品質保証まで手掛ければコストを抑えながら日本製として売り出せる。流量計は比較的軽い製品が多い。ハブをうまく活用できれば顧客ニーズに即応できる」

―沖縄工場はリスク分散にもなっている。

「沖縄工場ではアメリカ向けの半導体製造装置に搭載する流量計を生産している。顧客から日本はリスクが高いと言われたことに始まる。東日本大震災後、計画停電もあり、横浜工場だけでは安定生産に弊害があった」

「昨年3月の震災後、リスク分散という顧客のニーズに応えるため、夏までに生産体制を構築するということを最重要課題として取り組んだ。震災後は原発問題もあり、地震が少なく原発もない沖縄が適地だった。電力の安定供給ということも顧客への信頼性を確保することにつながった。横浜工場に並ぶ第2の製造拠点として稼働させ、高品質の製品の供給責任を果たす」

―県内製造業の発展について。

「ANAのハブ事業が発展の足掛かりになるのではないか。物流が増えることは集積企業にとってもプラスになる。今以上に中国への便が増えることを期待したい。さらに若い人材力、さまざまな優遇装置がある経済特区のメリットもある。沖縄は観光地としての魅力があることも利点だ。人の往来がより増えれば、沖縄が製造業の拠点として注目される可能性はある」

（聞き手 謝花史哲）

（水―金曜掲載）

2012年（平成24年）10月18日 木曜日
琉球新報

H24.10.18
琉球新報 5面